「第１回 幼児期から小学１年生の家庭教育調査」から読み取れるもの

白梅学園大学教授　無藤 隆

１．データからみえること

本調査は、母親の目を通しての子どもの育ちの様子をとらえているという限りにおいてであるが、幼児期の育ちとまたそれが小学校の教育においてどうつながり、どう役立つかを検討するための示唆を与えるものである。たとえば、振り返って小学校入学までに身につけてほしいことは、第１に、まわりの人にあいさつやお礼がいえる、などの生活習慣があげられる。第２に、物事をあきらめずに挑戦することができる、人の話が終わるまで静かに聞ける、人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりできる、などがあがる。第３に、えんぴつを正しく持てる、かな文字を読める、自分の名前をひらがなで書ける、などの学習スキルがあがる。これら三つはほかのところでも繰り返し重要性が認識され、また幼児期に育っていくものであり、小学校の生活や学習で重要なものとされている。

２．幼児期に育てるべきこと

幼児期に育てるべき大事なこととは何か。小学校での学習との関連でみたとしても、それはよくいわれる文字の読み書きなどより遙かに広いものが含まれることがわかる。生活上の自立はいうまでもなく大切である。そのうえで、文字が読めるとか数を数えるといったことも重要であるに違いない。また、言葉を順序だてて話すとか長さや高さを比べることも必要だとわかる。それに加えて、人の話を聞き、また自分の考えや意見を言え、物事に集中し挑戦でき、「なぜ」と疑問に思い、質問することが重要だとわかってきた。とくに論理的な思考力や学びに向かう力は日ごろの幼児の生活や遊びのいたるところで養えるし、また多種多様な場面で子どもが能動的にかかわってこそ、その力が育ち、身につくものであろう。特別な訓練というより、日々子どもが行うことに丁寧に応じることこそが、子育てまたは幼児教育の本道であることがわかる。

３．幼児期の学びの芽生えから小学校の学習に結びつくこと

小学校に入るまでに身につけることとして、あいさつができることとえんぴつが正しく持てることが大切であるとして、それはどう育てられるのか。あいさつは家庭や園での毎日のやりとりのなかで習慣となる。えんぴつの持ち方は練習が必要であるに違いないが、えんぴつで絵を描くとか迷路遊びをするとか模様を描くとかといった楽しみのある活動で使ってみることができるだろう。かな文字の読みは、文字と発音の対応がおおむね一対一となっているので、絵本に親しみ、まわりにある文字を読むことが多ければ、その文字の特定の模様をみて、それに対応する発音をすることを覚えていくだろう。名前を書くのは丁寧に書く練習でできるようになるはずである。ひらがなは書くのは書き順やバランスなど、比較的難しいものなので、すべてのかな文字を書けるようにするのは、それなりの手間がかかるはずである。自分の名前を書けることをこえて書くということは小学校教育の始ま

りの課題とされている。

挑戦することや質問できる、人の話を聞けることや気持ちを伝える、というのがかなり重要だとされているのは意味がある。これらの学びに向かう力は、小学校の授業に参加し学ぶ力の要となるはずのものである。授業では、そこでの課題をとらえ、自分の課題としてとらえ直し、そこに集中し、またわからないなら質問をし、さらに人と話し合うことが重要になるからである。それは幼児期に遊びで集中でき、大人やほかの子どもと対話することで育つであろう。遊びとはまさに自分のやりたいことに取り組むことであり、集中心を養う場である。また自分のやりたい願いが大きく、また同時に現実的になるにつれて、そこで取り組む時間も長くなり、多くの工夫を要し、さらにほかの子どもと協同することも出てくる。それを親や保育者が支え、刺激し、導くことで、子どもの力はさらに伸びていく。

4．小学校教育と幼児教育のつながりの問題

小学校の１年生の教育のあり方を考えるうえで、とくに示唆的なデータがある。子どもの自己主張や自己抑制、それらを調整しほかの人と協調したり、物事をあきらめずに挑戦するといったことは緩やかに年少児から年長に向けて成長していく。ただ、よくみると、小学生でいったん下がるようである。それは、新たな環境で、対応するやり方が異なるとか（たとえば、授業での意見の伝え方は幼稚園・保育園とは異なるだろう）、要求のレベルが高くなる（たとえば、同じ挑戦といっても、難しい課題になる）などが考えられる。ただ、同じ小学校１年生でもとくに低月齢の子どもにその低下が著しい傾向がある。これはほぼ同じ月齢の、でもまだ幼稚園・保育園にいる子どもと比べると顕著な違いがあり、単なる成熟や生活経験全般によること（たとえば、トイレの排泄など）とは発達の筋道が異なるようである。もし小学校１年生のほぼ１年の経験がそれらの特徴を押し上げるとすれば、どの月齢の子どもも同様に上げることが期待されているが、それはどうやら相対的に月齢の高い子どもに限られるようである（挑戦については月齢によらず全般に伸びていない）。そういったことは、小学校１年生への指導の仕方がその子どもの特性に合っていないため、幼児期の成果を受けて、さらに小学校で十分に伸ばしていない可能性があるのかもしれない。

5．小学校の学習に必要なこと

文字と数が大事なことは確かである。ただ、ひらがなが読めるとか、自分の名前が書けるといったことは日本の大部分の生活環境のなかではそう特訓しなくても身につくことである。読む力は、実は語彙を増やすことが肝心である。それは絵本を読んでもらうとか、大人との対話のなかで言葉を豊かにすることで育つ。さらに学びに向かう力の重要性がみえてきた。物事に集中し挑戦し、人とやりとりできることがその中心となる。それができていることが小学校での学習が成り立つことの基盤となっている。また生活習慣の自立がそれを支えていることもわかる。それらのことは、家庭教育と幼稚園・保育園での教育の双方が相まって進むものであろう。幼児教育とは子どもの情緒が安定したところからやる気が育ち、そしてそれが遊びに集中する力となり、物事に挑戦する態度となっていくことなのではないか。

「これからの時代に求められる子どもの育ち」への期待

東京大学大学院教授　秋田 喜代美

1．本調査の特徴:グローバルスタンダードに向けた３本柱

本調査の特徴は、大きく３点ある。第１に、これからの時代に市民として、生涯生活をしていくための基礎となる力を調査した点にある。「幼児期から小学１年生の家庭教育調査」という言葉からは、入学準備として家庭でのしつけや勉強への態度育成をイメージする人も多いだろう。しかし、本調査は入学直後のみならず、小１の学年末にも調査し、より長期的視点から何が幼児期から児童期の育ちに必要かを調べた調査である。第２に、保護者の視点からとらえている点にある。保幼小の連携接続が園・学校では進められている。だが、家庭ではその時期に何が求められるのかに答える大規模調査はこれまでなく、初めての試みとなっている。そして第３には、学年差、月齢差、出生順位差などを分析するという工夫で、子どもたちの属性に応じた家庭のあり方を分析で明らかにした点にある。

調査内容として、「生活習慣」と「文字・数・思考」とともに、「学びに向かう力」と本調査がオリジナルに命名した力に重点を置いて調べている。具体的には「自分の気持ちを述べたり、相手の意見を聞いたり、挑戦したり、自己を統制したり、他者と協調する力」などである。「学びに向かう力」は、21世紀知識基盤社会に不可欠な力として、国際的に議論され、その重要性が長期縦断研究からも実証的に明らかにされてきている。つまり、小学校入学だけではなくその後にも続く大事な力なのである。これらの力は「できるかできないか」がすぐには目にみえにくい。けれども、在学中の学業成績だけではなく、社会に出て人生を心身ともに健やかかつ豊かに生きていくための２１世紀型コンピテンシーの基礎と呼べる力である。現在ＯＥＣＤやユネスコなどの国際機関では、０～８歳頃までの時期を人生初期の学び（early learning）の時期と呼び、重視している。そして、国際標準目標（グローバルスタンダード）として、幼児期から児童期初期にどの社会でも育成すべき力とは何かに注意が向けられている。

2．本結果からみえた子どもの育ち

では今回その３本柱について、それぞれ何が結果として明らかになったのだろうか。

第１に、「生活習慣」については、個人差はあるものの、生活リズムは幼児期にほぼ育っていることが示された。またトイレでの排泄や後始末などには、家庭だけではなく集団保育がもたらす効果があることも、月齢分析から明らかになった。園の集団での教育による効果があらわれている。

ただし、生活習慣の中でも家庭での片付けについては、学年による発達的変化はみられず、年長児や小１でも十分とはいえないという事実もみえてきた。片付けは、次の行動を見通して自分の生活設計ができることや、ほかの人とともに気持ちよく物や場所を共有できるための行動様式を育てる意味で、重要な活動である。親にとっては自分が片付けてしまった方が早いために手助けすることもあるかもしれない。しかし、自律的な生活者になる習慣を育てる点から、日々の行動の意味や価値を見直してみるこ

との必要性を本結果は示しているといえるだろう。

第２に、「文字・数・思考」では、年齢とともに伸びていく姿がみえてきた。「読める」「書ける」「数えられる」などの行動である。これに比べて、順序だてて話したり、大小長短の比較ができるなど、より高次の思考が求められる行動では、年長児でも読み書き計数に比べ高くない。また、「えんぴつを正しく持てる」「絵本や図鑑を１人で読める」など学びのための道具の使い方の点では、さらにきめこまやかな配慮あるかかわりの必要性がみえてきた。今回、絵本の読み聞かせ頻度が学年とともに減少していく結果も出た。しかし、よく読み聞かせをしてもらっている子どもほど１人で絵本や本を読む（見る）時間も長いことも明らかになった。

ある意味のまとまりを持った文章を読むこと、書くことへの活動参加には、大人による導きが大事である。就学に必要なのは、ひらがなの読み書きや１０までの数の習得という発想をこえ、これからの時代に必要とされる知的習慣として、より高次の思考やそのための言語表現、また学んだり記録表現したりする道具としての本や筆記具の使い方を、保護者が一緒にかかわり、みてあげることが、より質の高いあり方につながることが示唆される。

第３に、「学びに向かう力」である。まず前二者に比べてゆっくりと伸びていくことが示された。だからこそ長期的に大事にしたい内容である。子どもは「好奇心」も高く「好きなことに集中して遊べる」し、自分のやりたいことなどの「自己主張」はできる。しかし「自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる」「人の話が終わるまで静かに聞ける」「物事をあきらめずに、挑戦することができる」など、その瞬間の自己の欲求をおさえて人とうまくやっていく自己抑制や挑戦する力に関しては、自己主張などに比べるとまだ十分ではないという姿もみえてきた。

これらの力は他者とともにさまざまな経験を積むことによって状況や相手に応じて行う行動であり、集団保育の中で育つ力でもある。園と家庭が連携を取り合って、子どもの育ちを見守っていくことが大事といえるだろう。

３．学びに向かう力を育む家庭の役割

今回の調査でいえるのは、第１に「生活習慣」が身についていることと、「文字・数・思考」の育ちと「学びに向かう力」の育ちは相互に関連し合っていることである。この意味で生活習慣はすべての基本となって、よい育ちのサイクルを生み出すといえる。

また第２に、生活習慣やマナーの働きかけは多いが、思考を育てるうながしはそれに比べて少ないことである。思考をうながすというと何かを教えることと捉えがちであるが、調査項目をみていただくとわかるように、「子どもが失敗をしたとき、励ましのことばをかけ」たり、「一緒に出かけた後、お互いに感じたことなどを話し合っ」たり、「子どもの質問に対して、（答えを教えるのではなく）自分で考えられるようにうながしている」などの働きかけであり、子どもに考える習慣や自分の行動への自信や見通しを育てていくことである。

第３に今回の結果では、第１子に比べて第２子以降になると、読み聞かせ頻度は下がり、物を使っての遊びも少なくなることが明らかになってきた。子育てや家事に忙しい状況の中で、第２子以降の方が実時間としては手をかけてもらう機会が少ないという姿も浮かんできた。幼児期には、子どもは自分に向けてかかわってもらいたいという思いは強い。一対一での親子のかかわりを、第２子以降でも、どのようにもつのかを考えてみる機会に本調査がなるとよいだろう。

また母親だけではなく、父親の帰宅時間に

よっての子どもの父親のかかわりへの違いも明らかになっている。父親も母親も皆が忙しくなってきている。この中でどのように協同しながら家庭の学習環境を整えて行くのかは、小１になってから考えるというのではなく、なめらかな接続に備えて幼児期から家庭でも考えていくことが望まれるだろう。

４．園・学校の役割

第１に、月齢分析からは、早生まれの子が遅生まれの子に比べて数値が低いことがみえてきた。これまでデータでは語られてこなかったことであるが、出生月による違いは大きい。その中で高月齢の子だけではなく低月齢の早生まれの子どもにも、主体的にリードしたりする機会や挑戦の機会を意図的に与えたりすることで、どの子にも学びに向かう力のよりよい伸びを保証していく配慮が必要だろう。また第２に、「話を終わりまで聞く」などの状況では、小１で数値が減少する結果がみられた。子どもたちが園から学校という環境の移行状況に応じて再度行動を調整している姿がみえてきた。「話をきく楽しさ」を実感させる経験を園で育てていくことで期待や予測をもって聞ける力を育てることが、園と学校の円滑な移行のためには両者で大切だろう。

子どもが段差をこえていく力を育てる保幼小連携を、子どもの実態に応じて、家庭とも連携しながら進めていくことが、今後さらに求められるといえるだろう。